小説　スーパーの女性たち
丸裸にしました。

小説「スーパーの女性たち」　泣き顔の女　静香　その１

　私は毎日決まった時間に駅前の喫茶店にモーニングに行く。駅から南に職場があるのか前から歩いて私とすれ違う人たちも毎日同じになる。もうかれこれ５年ほど前からスーパーのレジ係りの若い女性とすれ違っている、まだお互い声はかけたことがないがなんとなく気になっていた。

　気になる点というのはその女性はいつも悲しそうな顔でいまにも泣きそうな顔をしていたからだ。そしてたまたまそのスーパーのレジであった時もその女性は泣きそうな顔の笑顔で接してくれた。レシートには渡辺静香とありその静香さんは色白で黒髪が長くて上品な顔立ちで私はその静香さんの顔に泣き黒子があるのかと探したがそれはなかった。初めてあった時から５年ほど経つから年は３０才前後と勝手に想像していた。

　ある日、スーパーのテナントの中国料理のバーミヤンでランチをしていると偶然にもその静香さんが私の真横のテーブルに座った。やはりここでもいまにも泣きそうな顔だったのでつい見とれていると静香さんと目が合った。先に静香さんが、
「いつも朝駅前でお会いしていますネ」
「はい～もう５年ほどになりますね～綺麗な方だから気にしていました」
「あらら…そんな～なにもでませんことよ…」
と、笑っているが、やはり泣き顔になっている」

　それから数日たったある日のこと、私が近所の居酒屋「ポン吉」に向かっていた交差点で偶然にも静香さんと会った。もちろん静香さんをその居酒屋に誘うのは当然になる。そしてホロ酔い気分になったころに勇気を出して聞いてみた」
「あの～静香さん、失礼ですが、いつも悲しそうな顔で歩いていますね?」
「はぁ～やっぱりそう見えます…」

　静香さんはこの泣き顔は子供のころからで仲間からいじめを受けていないのに周りの大人はいじめられているとその子供たちをしかるから友達がいなかったという。これは高校、大学も同じでやはり友人は少なかった、そして大手のアパレルメーカーに就職したが、営業には向かないと経理に配属された。それでも人並みに恋愛をして結婚をしたのが２５歳の春で子供は２人できた。そのころから旦那に「家の中が暗くなるから笑え」といわれていた。もちろん静香は笑っているつもりだったが、旦那には泣きそうな顔に見えるといわれている。

　そしてその旦那は外に飲み歩くようになってフイリピンの女と浮気するようになった。そして去年の秋に離婚して２人の子供と暮らしているという。私は、

「１年前に離婚されていたのか…そして結婚してからあのスーパーに」
「はい、もう５年になりますが、子供が小さいからパートしか…」
「ところで…静香さんの本当の泣き顔は?」
「それが～泣いてもほとんど今のままと両親も友人もいっています」
「そうか～それは…」
と口ごもる私に静香さんは、
「ほら、伊奈利さんも私を…軽蔑している…」
と今度は本当に泣いているようだ。

　それから数回デートした後に私の友人が経営している会社に静香さんを紹介した。今度はパートではなく正規社員として月給でボーナスもある、それに社内に保育室もあるという好条件になったのでその祝杯を私の家でやっていた。その前にその友人からいい女性を紹介してくれたと感謝されている、まだ静香さんは勤務して一週間しかならないが、受付嬢から司会のマイクを握らしても静香さんの腕前はたいしたものだとこの業界でも有名になっているという。静香さんは、
「いゃ～そんなに褒められても…私は普通にやっているのに…」
「誰でも天職というのがあるが、静香さんは葬儀屋さんにとっては…その泣き顔が宝物になるそうだ…」
「もう～伊奈利さんまで…」
といいながら静香は私に抱きついてきた。やがて照明を消したベッドルームから静香の泣き声がいつまでも聞こえてきた。

（１話完）

小説「スーパーの女性たち」　赤いパンツを履く留学生　王桂英

日本語がかなり上手い中国の女性がレジにいた。胸の名札には「ワン」と書いてあったからわかったが、顔立ちそのものは日本人となにも変わらない。色白で化粧はまったくせずのスッピンでも若さからか肌が光っている。

そのワンさんがワコールの下着売り場で買い物をしていた。私は偶然にそこを通ったらワンさの方から笑みをくれた。私も笑みを返したが、次の言葉を用意していなかったので口をモゴモゴしていると、ワンさんは、
「もっと安い下着はどこにあるの?」
「ここね～メーカー品だから高い…しまむらなら安いよ」
「しまむら?聞いたことあるね…」
「ワンさん通勤はなにできたあるね」
ついこちらも中国なまりになってくるからおかしな話だ。ワンさんは自転車というから、「ほなワタシ案内するな～」
ということで２人で自転車に乗って「しまむら」にいった。

安いしまむらといっても下着売り場はなまめかしい、ワンさんはセクシーな下着には目もくれず赤いパンツとブラを数枚買っていた。その帰り道に家まで送っていくといったが、今日は夜遅くまでルームメートの同じ留学生の彼氏が遊びにきているから早く帰れないという。それなら居酒屋でもいくか?と聞くがワンさんはお酒を飲めない…。

それなら汚い我が家にでもくるかといったら笑顔でＯＫをしている。ワンさんは中国では赤い色は縁起がいいからと日本に留学が決まった時、親戚中から赤い下着をもらったという。そしてそれも留学４年でほとんど使い果たしそうだ。
「ワンさん、もう４年も留学しているの」
「はい、それも来年の２月までしかいられないの…」
「でも、また日本語がヘラペラだから日本にこれるよね…」
「それが、もう二度と日本には戻れないの…」

ワンさんがいうには父親は浙江省のある市で日本料理店を経営しているが、もう一つの顔は国民党の幹部だという。中国では国民党は非合法で弾圧が続いてる、そこで一家は台湾に亡命する機会を待っていたが、それが来年の２月でワンさんも在留期間が切れる、それと同時に中国には帰らず一度アメリカに渡って家族と合流して台湾に亡命する予定だそうだ。

「しかし、ワンさん、台湾の次の総統選挙では民進党の政権が予想されている。それに中台の歴史的会談で中国と国民党は仲がよいのでは?」
「それは表向きで中国国内では台湾が民進党政権になったら国民党を国家反逆罪で粛清して国民の目を台湾敵視に先導することになるの…」
「それで亡命…」
「伊奈利さん、そんな話より赤い下着を見てくれる?」

ワンさんは、奥のベッドルームでなにやら着替えをしている。そして伊奈利さん～と呼んだ。ワンさんは真っ赤なブラとビキニのパンツでポーズをとっている。
「おぉぉぉ～中国共産党の赤だ…」
「もう～これは健康とお金持ちになる縁起のいい赤なの」
「ところで伊奈利さん、そこのパソコンを２月まで使っていい?」
「パソコン、いいよ…でも、なんで?」
「色々と中国と連絡することがあるの…私のパソコンやケータイは傍受されている危険があるから…」
「おぉぉぉ、国際的な話になってきた」

ワンさんはベッドに横たわり私の返事を待っている。私の頭の中はいずれこのＰＣも中国に傍受されて…ワシが刺客に暗殺される…いゃ、そんなことはない、それより目の前には２６歳の飛び切り美人が…と約２０秒は悩んだが、私はワンさんの真っ赤な身体に飛びついていた。ワンさんは、
「伊奈利さん、やさしくしてネ、私…本当に男の人は初めてなの…」
「……ワシでいいの？」
「はい、伊奈利さんは命の恩人ですから…２月まではご自由に…」

（２話完）

小説　スーパーの女性たち　その３　笑顔の天使　真希

　私がこの地に来てからもう２０年の月日が経つ、大手のスーパーの狭間にあるレジが三つほどの小さなスーパーが２軒あった。この２軒とも近所のお年寄りに重宝されてそれなれりに流行ってはいたが、５～６名いた女子の店員の接客態度は最低のレベルだった。たとえばレジが一つで込み合ってきてもその近くで陳列作業をしている店員は気がつかない振り、また品切れの品物は倉庫にないのかというと、「そこになかったらありません」というのが定番だった。もちろん、スイマセン、ありがとうの一言などは聞いたことがない。

　ある時、ジャンボストアーという店に元気なパートの店員が入ってきた。その人は真希さんといい子供が２人いるという。以前には大手のスーパーでパートとして働いていたから即戦力となっていた。その真希さんはその愛想のいい接客態度で見る見る間に近所のお年寄りから慕われていた。私もこのスーパーに２０年通っているが、まだ店員との会話や笑顔なんてものは経験がなかった、当然ながら真希さんがいるレジを選ぶのは当たり前になる。

　かれこれ半年ほど経ったころから真希さんの姿は見なくなった。それが原因かは分からないが客足は目立って少なくなっている。そんな折、近所の医院で子供が風邪を引いたのか真希さんがいた。その医院の患者からも真希さんが急にいなくなって心配してたという話で盛り上がっていた。私もその話をしている中で真希さんとケータイのメールアドレスを交換していた。

　それから２～３回メールをやりとりした後に昼間我が家に遊びに来ることになった。真希さんがスーパーをやめた原因はボス格のパートとの確執でその女は美樹という。その美樹がいうには、
「この店は安売りがウリの店で客にいちいち愛想をしなくてもいい、それに時給も他のスーパーより安い、仕事もきついから真希さんのような接客は必要ない、他の店員にも迷惑がかかっている」
　もちろん真希さんは美樹に反論をしている、
「しかし、お客さんと笑顔の会話はこちらもストレスが解消して店のためにもなる、せめて、いらっしゃいませ、ありがとうございますは全員いうべきです」
　もちろん真希さんのほうが正論だが、美樹は店のボスで他のパートを引きつれやめられるとそれこそ即閉店なってしまうと店長は真希に過剰な笑顔のサービスはやめるようにと釘をさした。

　そしてその結果、真希さんはスーパーをやめることになった。私はこの話を聞いて真希さんに、
「世の中に過剰な笑顔のサービスなんてものはない、それは真希さんの人柄で店にとってもすば

らしい宝物を逃がしたことになる」と慰めていた。
「ところで真希さんの旦那はこのことを?」
「旦那は……元々病的なやきもちで男の客と仲良くしているとものすごく怒るの」
「ほう～なら、こうして２人でいるのを…」
「もういいの…どうせ疑われるなら私も不倫の一つや二つしてやると決心して今日は伊奈利さんのとこに来たの…」

　まだ昼間でカーテン越しでも部屋の中は明るいのにと思っていると真希さんはピチピチのジーンズを脱ごうとしているが片足でよろけている。そして命令調で私に手を貸せという、私もその命令に負けて真希さんをベッドに寝かせてジーンズの裾を力いっぱいひっぱるとスッポリ脱げた、そこにはセクシーで真っ赤なＴバックが…笑顔の天使の贈り物に私も過剰な笑顔になった。そしてそのころ真希さんが勤めていたスーパーのシャッターに「閉店のお知らせ」を２０年勤めた美樹さんが最後の仕事として貼っていた。
（３話完）

小説「スーパーの女性たち」幹部候補生麗子　その４

　京都の中堅スーパーも将来の人材確保のために４年生大学の正社員を確保している。とはいっても一つの店舗にはこれらの正社員は３～４名しかいない。それも３交代制ですから常時店にいるのは店長なぞほんの数名になる。これに対してパートの女性も３交代で陳列、惣菜まで入れたら１００名にはなる。

　これでは統制が取れないとパートの中から「レジ責任者」とか「〇〇主任」とかを選んでいるがこれも身分はパートのままで時給も３０円ほど高いだけだ。元々の時給も８３０円ほどで月に仮に２００時間働いても１６万円ぐらいにしかならない。

　この店にも立命館卒のフレッシュな女性が配属されてきた、入社から１年は幹部の黒服ではなくパートと同じ制服になる。名札には中川麗子とあり若葉マークが貼られている。客からはこの女性が正社員とはわからないが、生活苦から戦っているパートのおばちゃんと希望に燃えた若い女性とは区別が容易にできる。

　正社員といっても最初はレジの見習いから始めなければならない、それを教育するのは古参のパートになる。なにもわからない麗子さんにすればただただ頭を下げるしかない。１週間目ぐらいから麗子さんもなんとか１人でレジに立つことができたそんな折、私は麗子さんに、
「そろそろなれてきたようですネ!」
「はい～もう～なんとか～いつもありがとうございます」

　麗子さんがいう「いつも」とは麗子さんが入社してから毎日麗子さんのレジにいっていたからだ、
「そろそろ一週間だから、休みが楽しみだろう?」
「はい、それはもう～でも、いつ休みなのか誰も教えてくれません」
　そして次の日も次の日も麗子さんはレジに立っていた。やっと１２日目に休めたのかその日は見なかった。

　４月に入社して半年経ったころ麗子さんの名札からやっと若葉マークが消えた。しかし、休憩時間でも麗子さんは１人ポツンと弁当を食べていた。もちろん他の従業員からすれば社員さんでいわば年下でも上司になる。それよりなにより立命出身という麗子さんに対しての「ねたみ」もある。その上に麗子さんは色白で上品な美人とくれば女の嫉妬も中途半端ではなかった。

この店はバス路線が不便な場所にあり駅からは早歩きでも２０分はかかる。ある時、麗子さんは時間がなくやむなく駅前からタクシーに乗った、駅からだとワンメーターだが、それを見たパートさんは麗子さんに「さすが、社員さんは違うね、タクシーで通勤だから」と嫌味を言われていた。しかし、パートさんあってのスーパーだからそれには反論できない立場だと涙を飲んでいた。それからは暑い日も、雨の日も熱がある日も店まで歩いていたという。

これらのことをレジのわずかな間の会話で知っていた。麗子さんは１９時までの勤務だから逆算して駅周辺で待っていた。やっぱりその通りになり先に私を見つけた麗子さんはオーバーに喜んで抱きついてくれた。そのまま居酒屋「ポン吉」にどちらが誘ったのではなく自然に足が向いていた。

麗子さんは、私にはお世話になったと頭を下げている。
「色々辛いことがあっても必ず伊奈利さんが私のレジにきて笑顔で励ましてくれました…ありがとうございました」
「いやいや、ただ女好きのスケベーな親父ですから迷惑だったのは麗子さんのほうでは」
「今日辞令があって明日は休みでそのあくる日から本社で研修に一ヶ月、その後に郡部の店に転勤になります。ですから今日が最後になります」

聞けば麗子さんは広島出身で向日市のマンションに１人で住んでいる、明日は休みだから今夜は伊奈利さんと一緒にいたいのという。
「一緒に…さっきもいったけど～ワシは女好きのスケベーやで～」
「いえ、私にとっては最初の素敵な異性になります。何も伊奈利さんにお礼はできませんので…」

ということで２３才の麗子さんと一夜を過ごしましたが、このブログにその詳細を書けば削除されますから、続きは別のブログで…

（４話完）

小説　スーパーの女性たち…その５　完熟マンゴの味　夏江

　大手のスーパーと京都の中堅スーパーＭストアーは約数百メーターしかはなれていない。どちらも同じような低価格設定で人気のスーパーになる。その大手のスーパーで買い物をしているとカートにいっぱい食料品を詰め込んだ女性と目が合った。女性は見る見るうちに真っ赤な顔になった。そして
「いゃ～お客さんもここにこられるの？」
「まぁ～Ｍストアーと半々ぐらいかな？」

　その真っ赤になった理由とは、実はこの女性は夏江さんといい、Ｍストアーの古参のレジ係りでお客さんにはいつも元気よく「いつもありがとうございます」と笑顔で接客していたから客もこのレジ係りのファンが多かった。つまり、ライバル店にＭストアーの顔といえるこのレジ係りがなぜ？この店で買う必要があるのかと推理していたら。その夏江さんがお茶を誘ってくれた。

　「えらいところでお会いしましたネ」
と冗談まじりでいうと夏江さんは、
「はい、色々あってあそこで買い物をしてもどのパートのレジで清算をするのか気を使います。一応会社から無理矢理「レジ責任者」という肩書きがありますからどのパートとも仲良くしたいし、それに買い物のチェックもされるし」
「そんなものですか～」
「少し高い牛肉を買うとそれがウワサになるし、量が多ければ独身なのにと影口もあるし…ビールや焼酎を買えば男がいると噂され…自分が食べたいものぐらいはゆっくり買い物をしたいから…」
「それで…この店で買い物を？」

　夏江さんとはこうして話をするのは初めてだが、レジでは笑顔や目、態度で会話をしていた。それがもう２年ほど続いていたから今ここで２人でコーヒーを飲んでいてもなんら違和感もない。夏江さんはカートを引き寄せその中から焼酎を１本だして私にくれるという。
「私は鹿児島出身で主人の仕事の関係で京都に来たのが３０才の時、子供がいなかったからすぐにあのスーパーで働いてもう５年になります。主人は仕事仕事でほとんど家というより京都にいなかったのです。１年ほど前に仕事中に交通事故に巻き込まれて亡くなったのです。幸いマンションには死亡保険がかけてあってそれで完済。労災や加害者からの賠償でお金には困ってはいないが、パートの仲間はそのことを知っているから…」
「それで～高い肉を食えるからいいと～それってかなりの嫌味ですね～」
「ところで伊奈利さん、焼酎はお好きですか？」

「はい、最近安い焼酎にハマッテいます」

　それなら一緒に飲みましょうと汚い我が家で宴会をすることになった。さすがに鹿児島育ちの夏江さんは酒に強くて陽気になっている。
「伊奈利さん～私は男運がなかってやっと見合いで一緒になったのがあの男、結婚して７年になるが、その間にＨをしたのがほんのわずか…それでは子供なんかはできるはずがない」
「仕事が命という人が多いから…」
「ところで伊奈利ちゃん、Ｈビデオってある？」
「あぁぁぁ～そこにあるよ！今はＤＶＤだけど…」
「私と一緒に観てくれる？」

　ということで焼酎を飲みながらのＡＶ観賞になった。夏江さんはこういうＡＶがあるということを知っていたが、主人にも友人にもそんなことを言えずモンモンしていたという。これで私の知りたいことはもうすべて解決した気分…と私に抱きついてきた。夏江さんは３５歳で完熟のマンゴのような味がした。
（５話完）

小説　スーパーの女性たち　その６　秘密基地の女　玲美

　珍しくスーパーＭに朝一番にいったが９時開店直後で客はほとんどいない。魚のコーナーの前には背がスラリと高くて長い黒髪の女性がいた。ミニのスカートで背が高い分モデルのような雰囲気を持っている。その女性を追い越した瞬間に後ろから目隠しをされたその瞬間に柑橘系の匂いがした。
「誰だ～～～～」

　私のボケかけの脳が激しく働いてくれてはいるがその主はまったく覚えつかない。その犯人は「もう～水臭い～ワ・タ・シ・よ」というが、分からない。そしてやっと目隠しから開放されて見ると、そこにはこの店のレジ係りの青山玲美さんがいた。その玲美さんは、
「今日ね、出勤の日を間違えてきてしまったの…私は２日出勤して休み、そして３日出勤して休み、たまに４日のときもあるからややこしくて…」

　そしてお互いにレジを済ました後に玲美さんが、私、車だから送ってあげるという。駐車場は２階にあるので行くと玲美さんの車を止めている場所は非常口階段の隣でポツンと一台分だけスペースがありそこに軽が前進で止めてある。周りは三方壁で薄暗い上に軽の窓には遮光シートが貼ってあり外からは車内は見えない。玲美さんは運転席てなく後ろのドアを開けて先に乗りこんだ、車内は軽の割りには広く感じる。
゛「私、この場所がお気に入りでいつもここに止めているの、昼休みにはここでお弁当を食べたり、本を読んだり、お化粧を直したり、ネットサーフィンしたり、家に帰ると旦那と娘と息子がいるからここが私の唯一ゆっくりできる秘密の場所なの」
「秘密基地やな～ということは玲美さん、スマホを持っているのやね～」

　玲美さんのスマホに「音川伊奈利」で検索してというと一発で数点出たので玲美さんはビックリして適当に読んでいるようだ。
「へえ～伊奈利さん、やるやん…それにしてもこんなＨなことを書けるもんね～軽蔑…」
　おぃおい、軽蔑とはひどい、何を読んでいると聞くが答えないのでスマホを除くとそこは「官能小説」のページだった。そして、私を無視して小説に夢中になっているが、私は退屈で玲美さんのスラリと伸びた左脚を遠慮がちに触っても反応がない。さらにミニスカートを少し巻くっても嫌がらない、太もも辺りを摩っても反応がないが、こちらの脳からはＨ信号が発令されてもうどうにも止まらない状態になっている。

　私はその脳で考えていた。この玲美という女は不感症なのか？それともテレ隠しに知らん振りを…、いゃ、そんなことはないスカートに手を入れられても拒否しないのはもっとしてくれと

いう意味なのか？その時、玲美が、
「伊奈利さん、私のことをここに書くの？」
「いゃ～こんなことは秘密にするものだ」
「うそ～だって～ここに「スーパーの女性たち」という小説があるじやないの…それにスーパーＭってこの店よね！？」」
「いゃ～それは～その～あの～」

　この日はそれで終わったが、玲美さんがお昼休みは午後１時１５分から１時間ありますから、もしその時間にこの車がここに止まっていれば遠慮なく入ってきてくださいといってくれた。その後、この秘密基地に２回お邪魔したが、玲美さんは不感症ではなかった。

（６話完）

その７　パンの耳の人　菜々

　いつもモーニング行くパン喫茶は日曜が休みのために日曜日の朝の食料として土曜日にこのパン屋さんでパンの耳をもらう。そのパンの耳は透明の袋に入っているが、それをブラブラ持って歩いていると駅前のタクシーのドライバー、バス停の人、前から歩いてくる人のすべてがこの袋に目がいくらしい…そしていつの間にか「パンの耳の人」というあだ名がついてしまった。

　大雨の日に大手のスーパーにいくと店はガラ空きでレジ係りもレジから離れて買い物カゴの整理やその付近の清掃をしていた。その１人から笑顔で声をかけられた。
「お客さん、いつもパンの耳を持って歩いている方？」
一応、持って歩いている方？とはいっているが、確定している言い方だ。この３０才前後のレジ係りは美人で高橋菜々というが、私も気に入っていたのでよく菜々さんのレジに並んでいた。、
「はい、もうこの辺りでは「パンの耳の人」として有名になっています」
「それってお金が入りますの？」
「いぇ、店の好意で無料でいただいています」
「へえ～私も…パンの耳が大好きで…」
「それなら私の分を横流ししますよ～なんぼでも」

　菜々さんは時計を見て後１０分で仕事は終わるというから駅前で待ち合わせした。もちろんバンの耳を持ってだが、さすがに透明の袋ではなくエコバックに入れて駅で待ってると菜々さんが来た。それとなしに菜々さんを居酒屋に誘ったが、そんなもったいないという。それなら家に来いという。

　菜々さんは電車に乗って通勤をしていると思っていたが、実は駅からすぐのワンルームマンションに住んでいるという。私はコンビニでビールを買うといったが、これももったないから家にある安い紙パックのワインを飲もうといっている。部屋は質素なものでおよそ若い女性の部屋という色気もない。菜々さんは、
「なにもないでしょう～なにせ悪い男に母娘とも苦労させられたから」と笑っている。
そのワインを飲むがそのアテは私が持ってきたパンの耳を焼いたものだ。

「うーん～このパン…美味しい～」
「このパンはスーパーで売っている一斤９８円のではなく、一斤３００円の高級食パンのものです」
「へえ～道理でバターの味が口の中いっぱい」

　菜々さんの父親は仕事もしないで朝から酒を飲む人で母は苦労して一人娘の私を育ててくれた。お金がなくて近所のパン屋さんでパンの耳をもらってきて私のおやつにしてくれた。そして父は借金を残して死んだがその借金を母が返済した後に母も亡くなった。そして私も恋愛して結婚したが、その男は父よりもっと悪質で女遊びで借金を作り失踪したままだという。幸い子供がいなくて、その後、家庭裁判所で離婚が成立したが、私には夫の借金が残ったままで今も月々返済しているという。私が、
「それなら結婚生活は数年ほど？」
「はい、２５歳で結婚して２年ほど一緒に暮らして離婚して３年になります」
「３０才か～菜々さんは美人だから、これから先にいいことも…」
「いぇいぇ、もうこりごりで…」

　酒を飲んでいる割にはしめっぽい話に酔いはなかなかまわらない。私にもう少し金があればもっと関わりを持ちたいが、なんせ年金暮らしでは…と思っていることを察知した菜々さんは、
「もう、ゴメンナサイ～こんな話で…ねえ、伊奈利さん、今夜は泊まっていって…」
「いや～ワシも力になれない自分に嫌気がさしているとこで…」
「そんなんいいのよ～私はいつもパンの耳を持って歩いている伊奈利さんに生きる勇気をもらったの、私も貧乏でも堂々と生きようと…」

　そしてパン屋さんに事情を話して週に１回のところ２回に増やしてもらってそのパンの耳を菜々さんの休みの前日に持ってくると約束をしていた。もちろんその日は割り勘で宴会をすることも…そんな話の展開に私の脳も活性化したのか脳からＨな信号が…これは菜々さんも同じで２人は自然に抱き合い朝まで愛し合っていた。
（７話完）

小説　スーパーの女性たち　スッピンの聖子　その８

　ストアーＭのレジ係りで一際派手な化粧をしているのは彩美さんという４５才前後の女性だ。派手といってもケバケバしさはなく明るい化粧をしている、そして性格もこの店で一番明るく客ウケも一番になっている。ある日の昼前に店に行くとその彩美さんはスッピンの顔でいる、そして恥ずかしそうに、
「なんで午後に来てくれなかったの？昼休みにお化粧をしょうと思っていたのに！」
「あれれ…でも～スッピンでも綺麗だよ～」
「へへへ…昨夜は朝の２時まで飲んでいたの～それで寝過ごして…」
「へえ～どこで飲んでいたの？」
「ほら、あそこの九条ネギ畑の前の「居酒屋　ねぎぼうず」よ」

　カラオケ居酒屋「ねぎぼうず」とはママが８９才と高齢で客のほとんどが男女の高齢者でいつも賑わっている店で私も数回はいっている。アルバイトの女性も若くて６０才、ナンバー１の女性は７０才の咲ちやんという。私は、
「その店ならよく知っている」
「あらら…実はネ、私…そこでアルバイトしているの、火曜日と金曜日の夜７時から１１時まで、お客さん、良かったら来てネ、そそ、店では「聖子」っていうの…」

　そして次の火曜日に居酒屋ねぎぼうずにいった。店に入るとママが、
「あら、ご無沙汰ね…どこで浮気していたの」といいながらその聖子さんに私を紹介してくれている。「この伊奈利さんというのは作家の先生で昔は新聞やテレビにでていたの、私も伊奈利ちゃんの本を買ったのよ～」聖子さんは、
「へえ～お客さん、作家さんなの～」
「いや、ほんまもんの作家の夢をみている単なるナマケモノです」

　こうして１１時まで居酒屋で遊んで私と聖子さんと近くの「天下一品」にラーメンを食べにいくことになった。そこで聖子さんは、
「私の４５年の人生は波乱万丈でもう死のうと何回も思ったの…そんな私の一生を小説に書いてくれない？」
「それはいいけど～いつまでもそんなことを思っていると一歩も前に進まない、そんなことより、ねぎぼうずのママさんの歳になるまで後４５年もある、その４５年をどう生きるかの脚本を書いたほうが人生は楽しいと思うが、それでも過去を書いてほしい？」
「へえ～さすが先生ネ、なんとなく目からウロコが…」
「歌手の松田聖子も色々あったが、今でも輝いている」

「そそ、そうなのや～私も聖子ちゃんのファンで化粧もそれで…」

　こんな話をした後で聖子さんを家まで送るといったが、聖子さんは「私の家で飲みなおしたいという」さすがに私も「明日はスーパーの仕事だろう？」というと、なにいっているの私はまだ若いから２時間も寝ればと強引に私の家に押しかけてきた。そして「私も過去の不幸にこだわってきたが、今夜で過去ともおさらばできそうです。その記念に過去を忘れるぐらい先生に抱かれたいの…」

　そしてそのあくる日の朝、聖子さんは「キャーまた遅刻する～」とスッピンの顔でスーパーに出勤していた。私も心配になって店にいくといつもの元気な彩美さんが客に笑顔で対応していた。そして彩美さんは私を見つけて満面の笑顔でピースサインをくれた。
（８話完成）

小説　スーパーの女性たち　Ｈのワンポイントリリーフ　景子

　なぜか？このストアーＭのレジ係りからよく人生の相談を受ける。まぁ～相談というよりグチを聞くだけだが、今日も駅前の居酒屋「ポン吉」で景子さんと待ち合わせしている。この景子さんは同じ店の彩美さんの紹介で一度喫茶店であったことがある。そして景子さんが居酒屋に来た。

　その相談というのは、
　このストアーＫは１０月からレジ係りの時給が９１０円になった、私はこの店に入って５年になるが最初は８３０円でそれから年に２０円上がって今はやっと９３０円になった。それがレジもまともに打てない人が９１０円だというのが腹が立ってしょうがないという、これもしょうもない相談というよりグチになる。

　この景子さんというのは高校を卒業して中小企業に入社したが、２２歳で退職してこのスーパーのパートとなった。その２７歳の景子さんが、
「たしかに９１０円はいいから結構面接に来るらしいの、その都度、私が古いということだけで新人さんにレジを教えているの。そら～私が正社員だったらそれもいいが、私もパートよ！？。しかもレジもまともに打てない人とたった２０円しか時給が…もう、それが腹がたって、たって店を辞めようかと思っているの」
「ほう、９１０円とはけっこういいね、京都府の最低賃金は８０７円だからそれよりも１０３円もいい…しかし、する仕事いえば正社員とまったく同じで時給に換算してもパートの賃金は安すぎる」
「そそ、そうでしょう…社員さんはボーナスもあるし、賃上げもあるし、将来幹部になれる夢や希望あるが、パートにはそんなものはない」
「そう景子さん、けっこうセンスがいいよ～」
「うん？伊奈利さん、私を褒めてくれているの？こんなグチをいっている私を…」
「いゃ、本質を突いているからね～だからパート同士でいがみ合っていても何の得にもならない」
「そうか～私も５年前はまともにレジも打てなかったが…誰かのお世話になっていたのね～」
「そう、その誰かも今の景子さんのようにグチをいっていたかも…」
「ところで来年結婚するといっていた彼は？

　景子さんはもう５年も彼と付き合っているが、彼の給料は手取りで１８万円もないという。その上に車が好きで３年のローンが終わるとまた新車と月々４万円ほど払っている、それにスマホや通信費に２万円、カードローンも使っているので貯金などできない。私は彼との結婚資金にと

３００万円貯めたが、これでは私がスーパーで働いても生活は苦しい、それに子供でもできると…」
「そら～無理やね…お金の問題でなく、彼の性格が…」
「そう、それで彼とは別れたが、やっぱり寂しい時があるの、女１人ではなかなか飲みにもいけないし、それにこういうグチを聞いてもらえる人もいないし…」

　それを聞いていたママが、「伊奈利さんはいい人だから次の彼氏ができるまでのワンポイントリリーフになってもらったら」というと景子さんは「うん」とうなずいている。それなら善は急げとママはタクシーを呼んでいる。
「おぃおぃ、ママなんでタクシー？」
「なにいってんのあんな汚い伊奈利ちゃんの部屋で初夜を…今夜は南インターのラブホよネ」とママが景子さんにいうと、景子さんは笑顔でうなずいていた。その南インターへのタクシーの中で景子さんが、
「あのママさん、なんで？伊奈利さんの部屋が汚いと知っているの？」
「いゃ～それは、あの～その～」
（9話完成）

スーパーの女性たち　チェッカーは天職　里美　その１０

　午後１時ごろスーパーＫに行くと若い女性から声をかけられた、顔を見て「ハテ誰？」という顔をしていたらその女は上着を両手で開けて中の服を見せている。そこには見覚えのある制服が、もう一度顔を見たらレジの里美さんだった。里美さんは、
「今日はお弁当を持ってこなかったから店でなんか買おうと思っているの」

　この店では従業員が休憩時間に店で買い物をする場合は頭の三角巾と上の制服を隠すように上着を着るようになっているという。これがなかなか邪魔くさくて三角巾を一度取るとまた髪を整えなくては…と里美さんはこぼしている。そそ、私来週から惣菜の方に配置替えなの…でも…
「あれれ、里美さんはもうレジは大ベテランではないの？」
「そう、前の店からだと１０年、チェーカーコンテストの全国大会の代表にも選ばれ入賞したたことがあるのにね…」
「そうか～それは大変やな～」

　こんな立ち話をしていたが、もっと話を聞いてほしいというので駅前の居酒屋「ポン吉」で待ち合わせをした。里美さんの私服は白のピチピチのパンツと白と黒のボーダー柄のセーターで３０才よりは三つほど若く見えた。子供は小学生と保育園児の２人で旦那と４人暮らしだそうだ。里美さんは、
「スーパーＫもそうだが、この業界はこれから先もっと人手不足になるとレジ係りを養成しているの。しかし、１日中レジも忙しくないからレジのできるパートを直営の鮮魚、八百屋、肉屋、惣菜、陳列に配置替えして店が忙しくなったらこれらをレジに立たせるの」
「あ～それで衛生帽を被ったままでレジに魚屋さんや惣菜の人がいるのか～」
「そう、それに各部署のパートが急に辞めてもいいように私たちがその仕事も覚えるようにしている」
「なるほど…最初はレジを仕込み、慣れたら各部署の仕事も仕込めば効率よくパートを配置できる。それで里美さんは惣菜を習いに…」
「そうだけど…私はあの揚げ物の焦げた油の匂いが大の苦手で吐き気がするの…」
「そんなことをいったら、青果も鮮魚も水を使い冬は寒く手も荒れる、しかし、パートをオールマイティーに使うならパートではなく正社員にするべきだ」
「そう、私はレジが天職だと思っていたからここに就職したの」

　里美さんも一応スーパーの店長に配置替えは困ると訴えたが、店長そのものもそんなに権限がなく本社の命令だという。そして結局、里美さんは本日で辞めたという。さらに里美さんは、

「旦那は家で友禅の手書きをしているの、口煩くてやさしさの欠片もないから家ではゆっくりできない。それが明日から次のスーパーが決まるまでの何日間は針のむしろに座っているような生活が待っているの」
「大変だけど…私にはなにもできない」
「でも～今日こうしてグチを聞いてもらえたからまた明日から生きられます。伊奈利さんにはなにもお礼ができませんから…せめて…」
「えっ？せめて？えっ、それって私をムチとローソクで攻めてといっているの、もちろんジョークだけど…」

　そんなジョークから空気が変わったのか、酒がまわってきたのかはわからないが、２人は自然にキスをしていた。もうこうなればこの小説も１０回目になり、いつものパターンになるのは読者の皆様もご存知になる。はい、その通りで我が家でしっかり愛し合いました。

（１０話完）